

父



KOREA



郭 早苗

父

KOREA

郭 早苗



長征社

郭 早苗

一九五六年神戸市生まれ。
神戸市職員。

父・KOREA

定価 一五〇〇円

発行 一九八六年十一月二十五日

一九八七年二月五日 第三刷

著者 郭 早苗

発行者 市山隆次

発行所 長征社

大阪市淀川区西中島四―六―三〇―三〇一

電話 〇六(三〇四)一三九一

郵便振替 大阪三―一五七五五

印刷 明新印刷株式会社

製本 株式会社協真社製本所

●落丁、乱丁本は、お手数ですが小社宛お送り下さい。
送料小社負担でお取替えいたします。

©郭 早苗 一九八六年 0095-860474722

父
■
K
O
R
E
A

家に入った途端、母が飛び出してきた。「お父ちゃん死んだ。お父ちゃん死んだ」という、うわずった母の声を後にして、部屋へ上がってみると、布団が敷かれ、父が静かに寝かされていた。「お父さん死んだのよ。お父さんが死んだのよ」。集まった叔母達が私の背に繰り返す。張りつめた空気に押されて、父に近付き、顔の白布をはずした。父の老いた寝顔は安らかだった。色白の肌がいつそう白く艶やかで、死んでいるとは信じられなかった。額に手を当ててみると冷たかった。なるほど、死ぬと冷たい。なにか理科の実験をしている気分だった。

八月の半ばが過ぎていたが、連日三十五度を超える暑さが続いていた。地面も空気も乾き、蒸すような毎日だった。

その日、私と光玄こうげんは、休日の混雑を避けて休暇を取り、出かける算段をした。友達に誘われて海へ行くことになっていた。前年生まれた培つちかを連れて、親子三人で遊びに行くのは初めてだった。

私も光玄も自分のことにかまけて培を放っておいた。わざわざ両親の家に培を預け、持っていくものの準備に時間をかけたのも、子供を連れ歩くのに不慣れなためだった。

やってきた友達と遅い朝食を済ませると、もう一時近くになっていた。うっかりすると真昼どきの暑さにうだって、一日身動きが取れなくなりそうだった。培を迎えに行き、車に乗り込むだけで、もう疲れた。

海水浴シーズンはピークを過ぎて、意外なほど人は少なかった。浜辺の海の家も二軒出ているだけだった。しかし夏はたけなわである。積乱雲が夥しく湧いて水平線を鮮やかに区切り、垂直に降り注いだ烈しい太陽光線が砂の上に碎けてきらめいていた。海は遠浅で、崩れ波が寄せている。

そこへ行くのは車で一時間を要した。出かける時にもう疲れていたが、風が磯の香を吹き込んでくるようになると、気分が良くなった。これから海で過ごすという楽しさが、車の振動につれて浮き立った。それでも畑をならしただけの粗末な駐車場を出た時は、まだ期待していなかった。麦わら帽子をかぶった農夫が、随分と暇そうに車のキーを受け取ったからだ。こんな絵のような景色を海が開いているとは思わなかった。

脱衣を終えると、光玄は沖へ向かって泳ぎ出し、培は友達二人に手を引かれて、波打際へヨチヨチ駆けた。少し遅れた私はザラザラした砂の感触に足が進まなかった。海の拡がりに身をさら

すのが怖かった。幼い私が初めてやってきた時、海は私を取り込もうとした。父の腕に戻され、年を重ねたが、今でも海は怖い。

どちらも子供好きの友達が、培と無邪気に波に戯れている。私と光玄ではなく、二人の方が培の親に似合う。母と父ではなく、二人の方が幼い私の親に似合っただろう。波に乗せて時間が寄せては返す。過去と未来が水平線上の私を現実から離していく。

呼ばれて海に入ったが、夢を見始めた私は漂うことしかできない。波遊びに飽きた培と砂山を築いていると、光玄が上がってきた。髪が額に張り付き、肌に水滴がきらめいていた。海の近くで育った光玄の体は、すっかり海に馴じんでいる。友達二人も風景の中に溶けて見える。私といえば、水を含んだ砂をぼんやり掘り返すばかりだ。こうした自然に取り巻かれ、波音を耳にしていると、自分がどこにいるかもわからなくなってしまうのだ。潮の匂いが体の深みまで入り、果てなく虚しい。

やがて海が人払いを始め、泳いでいた人達もほとんど帰っていった。海は夕なぎ、銀色にとろけるようだった。黄昏の時刻が近付いていた。私達も帰り支度を急がなければならなくなった。

海岸沿いの道路は夕方のラッシュのため、混雑を極めていた。車はゆっくりと最後の日盛りを走った。なまぬるい風が涼しさより、むしろ暑さを運んでくる。目を閉じると、奇妙なイメージが網膜に現われた。光の海が拡がり、その上を光の粒が舞い踊る。背に射す西日が傾き始めると、

光の粒はいくつもの仮面になり、柔和な笑いで私を包む。淡い金色の世界で私は心地よく溺れそうだった。幻影は幼い私の遊び道具だったが、久しく手にしたことがなかった。懐かしく現われたのは、海で時間を失い、過去と未来の交錯を、波の間に間に見たせいかも知れなかった。膝にのせた培が目覚め、車が街なかに入ると、幻はゆるやかに遠のき、消えていった。

ひどい暑さの夏、仕事の来ない日が続いていた。父は母と靴底を加工する内職で暮らしていたが、アパートの土間の作業台は、整えられて使われないままだった。父は来る日も来る日も仕事を待ったが、その様子は哀れだった。物心ついてから働き詰めの父にとって、仕事が日常のリズムだった。仕事の無い日々は、父を容赦なく現役の時間から追い立て、父の地盤を崩した。

その日、六十日ぶりの仕事が入った。父は明け方に起きて、わずかな数量の靴底を飛びつくように片付けてしまい、朝食時にはもうすることがなかった。培を待ったが、いつもの時間にやってこないで、仕方なく鍼灸院へ出かけていった。夏の暑気が高まるにつれ、身体の弱が目立ってきていた。鍼を始めたのは一年前だが、仕事がなくなつてからは頻繁に通うようになった。ヨチヨチした足取りで帰ってきたのは昼前だったという。死んだ後、父の手提げ鞆を開けると、もらったばかりの目薬と、新しい市バスの回数券が入っていた。鍼の後眼科へ立ち寄り、午前中の時間をつぶしたのだろう。

留守の間に培が来ていたので、二人で風呂に入り外出の汗を流した。父は子供を風呂に入れることが好きだった。私や弟妹も、幼い頃は父に銭湯へ連れていかれた。四カ月前に引越して内風呂ができたが、おそろおそろ培を抱いて入ったのは、培がようやく一歳になった三週間前だった。それからは毎日三回入った。仕事が無いので、それだけが日課だった。父のおかげで培にはアセモ一つ出なかった。

私が培を迎えに来た時は、昼食を終えていた。テレビの画面から甲子園の沸き返る熱気が伝わるなか、父と培はバイバイを言い交した。その時、死はもうそこまで来ていた。父はゆっくりと生から死へ転回しようとしていたのである。

父の死は突然だった。医者にすすめられたことだが、八月に入って父は無理な減食を始めた。糖尿病を治すため、絶対の減量を言い渡され、それから十七日後に息を引き取ったのである。猛烈な暑気に衰弱した身体が壊れてしまったのだ。病気のためだけではなく、骨髓まで使い果たした身体に、減食は死の引き金を引いたのだ。

母は乾いたばかりの洗濯物に埋もれていた。連日の野球放送にはうんざりなので、別室にこもりアイロンがけをすることにしたのだ。培が出かけ、昼食も終えたばかりで、夏の午過ぎの時刻はゆっくりと母のものだった。

テレビをつけると、日本航空ジャンボ旅客機墜落犠牲者の初七日の模様が映し出されていた。五百二十人の死者を出した事故は航空史上最大のもので、連日マスコミを賑わせていた。悲惨な運命をたどった人々のニュースは、ひとしなみ心を痛ませる。画面を通して法要に参加している気分になってしまい、母の作業はかどらなかつた。

途中トイレに立った時、父の後ろ姿を目にしたが、テレビの前に横になっているのは常々なので、特別気にも止めなかつた。ただ、父の様子にふと固さを感じた。ふたたび入った部屋で、その固い印象に不吉が漂い始めた。

母が考えていたのは、もう日航機のことではなかつた。自身の心配ごとに取憑かれたのである。八月に入ってから以来、父は自分の弟に繰り返し見舞を重ね、墓参りを急ぎ、猛暑をおして増を遊園地にまで連れていった。父が弱った身体で忙しく時間を費やしたことも、何かいわくありそうな気がして、母の不安はおおられた。たぶん死んだ。アイロンを動かす手に力がこもり、死という言葉がはつきりと形を整えていく。母はまず父の死を確認しなければならなかつた。だがアイロンかけが済むまで動かなかつた。急に沸き起こったできごとを身体さえもが拒んでいた。心の準備をする猶予が母には必要だつた。

ちょうど午後四時であつた。洗濯物を片付け風呂を沸かすうち、母は無用意な状態を脱した。姿勢を崩さない父は死のあらゆる兆候を呈していた。呼びかけたが、まったく動かない。その背

中の向こうには、高校球児の汗にまみれたユニホームが駆けめぐるって、生を謳歌している。

父の死を確かめると母はたちまち動き出した。顔がはてり頭が空っぽだったが、対応は適格だった。悲しみとは違う、恐怖に似た感情が母を駆り立てた。布団をのべ、父の巨体をその上に横たえ、医者と葬儀屋に連絡し、湯を沸かした。退社間際の弟に電話をし終えた頃には医者 came が、既に死んでいたのだ、医者には格別することもなかった。死亡時刻は推定するより方法がなく、瞳孔と腕の死斑から死後二時間という診断が下された。午後二時には死んでいたということだ。一時過ぎに私と培を見送った後、父は足に薬を塗り込んで横になった。その薬を使い切ったので、「明日もらってきて欲しい」と母に頼んだのが一時三十分だった。あの時、父に残された時間がわずか三十分だったことに、母は慄然とした。

車は団地の前に止まった。西日がけだるく降り、淡い影がアスファルトに投射していた。私達は馴じみのお好み焼屋へ行くため、また培を預けるつもりだった。それで光玄と友達を待たせておいて、私と培は両親の住む棟へ向かった。入口に長く会わない再従兄が立っていて、私の顔を見て一瞬沈黙に陥った。どうしたのだろうと思ったが、まさか父が死んでいるとは予想しなかった。

父の死体に対座した時、耳にはまだ海の音が残る、波間に揺られているような気分だった。死

の瞬間はどんなだったろう。深い眠りに落ち、懐かしい大陸の風に吹かれて、生死の境をうっかり越えてしまったんじゃないか。死の淵の中で生を振り向き、くやしがつている最中かも知れない。そう思うほど、死体の父は死体らしくなく、目を閉じて夢にまどろんでいるように見えた。やがて波の音に替わって、叔父や叔母達があちこちに電話をかける声が聞こえ、葬儀屋と打合わせをしなければならぬ立場を知った。こうした役目は私のものだった。

取りあえず、待っている光玄と友達に事態を告げなければならなかった。沈みかけた太陽を受けてキラキラ光る車体の前で、三人は煙草を吸っていた。その足もとの影が長く、暮れ方の近いのを知らせている。しかし空はまだ明るさをとどめ、父の死については、夏の日午後にふさわしくない話だと思った。どんな顔をして伝えればいいかが気になった。

私の感情はいつも間に合わない。父の死に、悲しみは大幅に遅れ、驚きさえもまるで間に合わない。伝える時に感情が結び付かない場合、説得力を欠いてしまう。言葉を発する前に、せめて驚きを準備しなかったが、心は平静だった。「お父ちゃん死んだわ」と言った時も、ついにつこり笑ってしまった。光玄の表情が硬くなり、友達顔にもショックが走った。その様子を見ても、私から笑顔は消えなかったが、光玄は支えるように私の肩に手を回した。

光玄と私は道を急いだ。夕暮れが近くなり、一面に茜色の光がにじんでいた。街の影が沈み始め、蟬が必死に鳴いている。つい先刻見た父の姿に重ねて、また海の波が思い浮かんだ。緩やか

な波が引いて、死体の父を沖へ運んでいく。黄昏は短かった。部屋へ入った時分には、もう暮色が出来ていた。

死は、それに伴って起こる煩雑な物事が多すぎて、情緒に浸る余裕を与えない。実際、私は泣かなかつたし、きちんとネクタイを結んだ葬儀屋と打合わせをするうち、ますます無感動な気持ちになった。

葬儀の値段は法外だった。月々掛け金を積み立てていたので、会員サービス価格ということだがべらぼうに高い。香典をあてにして申込むしかなかった。しかし、葬儀道具一式貸し付け料、棺・生花・会葬御礼葉書印刷手数料、葬儀自動車・火葬場の仲介料など、すべてセットで無節操に便利なシステムだった。アフターケアも行き届いていて、香典返しから仏壇まで世話するといふ。

身内が死ぬのは珍しくないが、誰も死後の切り盛りの経験は無かった。それはむしろ死んだ父の役目だった。不慣れた遺族に代わって、そつなくやっけてのける商売は、この際ありがたかった。事務的かつスピーディに、インスタントのダンボール製祭壇をしつらえながら、寺への連絡、死亡診断書や遺影の用意についても、丁寧な指示をくれる。私はただその通りに動けばよかった。死体は孤立感を保ち、清潔な空虚を放っていた。夏の盛りなので、腐敗を防ぐためドライアイ

スが置かれ、クーラーがフル回転した。もはや父の体は父にとって無意味だった。これから始まる儀式の飾り物としてのみ、そこに存在していた。その枕もとには、膝をつき合わせて人々が並んだが、遺体は死の残骸に過ぎなかった。遅く帰ってきた妹は、いきなり狼狽の色を見せ、しゃくり上げて泣いた。しかし死んだところを見ないかぎり、それは重みのないものだった。そして妹も葬儀という催し物のスタッフとして、走り回らなければならない。忙しくて泣き続ける暇は無かった。

葬儀は本来なら翌日ということになるが、時間的に段取りがつかず、翌々日に執り行なうことになった。自宅で仮通夜を済ませ、通夜からは集会所に場所を移して営むのである。

納棺は、葬儀屋二人と弟との三人があたったが、ひどい重さに、抱えるのはやっとであった。棺は父の体に合わなかった。無理に押し込んだ途端、窮屈な寝棺から、胸の上に組んでいた手が高く持ち上がり、そしてはみ出した。その手が、硬直した黄色い手が、父の死の現実を私に示した。初めて涙がこみ上げて、目に映る屍が崩れた。ドラマチックな興奮は起こらなかったが、納棺にきしむような抵抗をする父が情けなくみじめでならなかった。

朝の光の氾濫する中に身を置くと、父の死など無かったような気がしてくる。集会所で父の遺体と一夜を過ごしたのは、家族と、最も父が親しんだ血縁だが、一日の目覚めにふさわしく、み

な無防備な顔をしている。やがて、ひりつくような暑さが強まり、緊張がみなぎって儀式が始まる。

葬儀は故郷の風習にしたがって、盛大に執り行なわれ、黄色い麻の頭巾と祭服を着けた喪主の弟と、白いチマ・チョゴリの私と母と妹を中心に、大勢の人が右往左往した。

朝鮮民族は、白衣の民族と呼ばれ、普段着にも白いチマ・チョゴリを着用することが多かった。が、そのいわれは、十五世紀以来喪服として、白衣の風習が定着したことによる。遺族は、死者を守れなかった罪人として扱われ、彩りのない質素な木綿に身を包むのである。だが、時は夏、太陽のまぶしさを最も感じさせる白が、私達の衣裳だった。

華美に祭壇に囲われ、幕入りしている遺体に代わって、白衣の私達こそ死劇の登場人物として、十分印象的だったろう。

葬りの道を進むとき、太陽のスポットを浴びた私達に、野良犬までが視線を注いだ。だから私はうなだれたくなかった。頭を上げて多くの会葬者と面していたかった。二度は無い父の祭の細部まで漏らさず見たかった。

白木造りの霊柩車につらなるタクシーは、遺影を捧げた私と母と妹が乗った。窓枠で四角く区切られた町は、その日も汗を吹き出していた。街路樹が濃い影を直下に落とし、目のくらむような反射の通りを人々が雑踏する。そこには何事も起こってはず、平常のダイヤが組まれているのだっ

た。

窓を開けると、車中に騒音が流れ込んでくる。それは生活の音だった。葬儀という特別の空間で遺族という大役を果たし、満足していた私だった。その満足は、こうして世間に触れたことで急に萎縮してしまった。遺族など、少しも珍しくはない。誰もが日常に経験することで、現実生活の一部に過ぎないのだ。

父の死の突然が私の現実を夢に変えてしまっていた。死から葬儀までの三日間、情景全体が現実感を失い、閉じ込められた時の中で私は過ごしていたのだ。ただ一度、父の遺体の硬直した手に心動かされたのは、あの黄色い手が一瞬夢を突き破り、現実を私に指し示したからに違いない。

柩が台に載せられ、僧の読経の後、扉が閉ざされた。その音で私の夢が覚めた。